

日本語を母語とする中国語初学者における 簡体字誤記の傾向

花尻 奈緒子

要旨：本論は、日本語を母語とする中国語初学者における簡体字誤記の傾向およびその指導法について検討する。「簡体字」は簡略化された漢字であり、1950～60年代に中華人民共和国が制定した現代中国語の文字である。日本国内の中国語教育においても、基本的に簡体字が使用される。日常的に漢字を使用する日本語母語者にとって、簡体字の習得は欧米人に比べ容易であるため、簡体字の書写が試験時の採点対象となるにも関わらず、学習者・教員双方において、文法・表現・発音ほどの注意が払われていないのが実情である。三重大学中国語統一試験および中国語講義中の作文を対象にデータ収集を行い検討したところ、誤記が決して稀ではないことが確認されたほか、日本で使用される漢字の知識は習得の補助となる一方で、外国語の文字であるという認識が不足するために、却って正確な簡体字を記憶する障碍となっていることがわかった。以上から、日本漢字の素養から発生する誤解を排除し、誤記が容易に起こり得るものであると認識させる指導法を採ることにより、正確な簡体字の習得を促すことができると考えられる。

はじめに

簡体字とは従来の漢字の画数を減らし簡略化した漢字体系であり、中華人民共和国政府が識字率向上を目的として、1950年代から60年代にかけて定めたものである。従来の漢字は「繁体字」と呼ばれ、中国大陸政府の直接統治を受けない特別行政区の香港、そして台湾・各国のチャイナタウンなどにおいて現在も使用されている（但し香港では、2015年12月に課程發展議會「更新中国語文教育學習領域課程（小一至中六）諮詢簡介」によって小中学校における簡体字教育が基本理念として定められ、議論を呼んでいる）が、日本国内において中国語を学習する際は、基本的に簡体字の読み書きの習得が求められる。日本中国語検定協会による中国語検定においては2級以上の試験問題にのみ「解答は簡体字の使用を原則としますが、特に指定された場合を除き、簡体字未習者の繁体字使用は妨げません」との注意書きがあるものの、3級以下では「記述問題は簡体字を使用してください」とあり、簡体字の習得が受験の前提とされている。三重大学における中国語履修者の期末統一試験においても、前期・後期ともに記述式の作文問題が課され、文法・表現に加えて簡体字の正誤が採点対象となる。

日本語母語者が、日本の漢字とは異なる漢字体系である簡体字を習得する際、日本漢字の素養が干渉するため、独特の誤記の傾向が発生する。本論は、日本国内の中国語初級教育の現場における、より効率的な学習方法構築を目標とし、特に日本語を母語とする初学者の簡体字誤記のパターンと傾向を、実際に誤記されたもののデータ分析を通して、具体的な誤記の原因お

よび指導法について検討する。

なお、本論において「偏」「旁」という場合は部首を指さず、漢字の部分としての位置関係を指すこととする。また、中国語の簡体字に対し日本で使用されている漢字を「日本漢字」と称する。

1. 先行研究

日本において、中国人日本語学習者の日本漢字誤記についての先行研究は数多いが、日本人中国語初学者の簡体字誤記についての研究はあまり見られない。向野崇倫・向野康江 2008 は、日本語母語者向けの中国語学習について、漢字の素養をアドバンテージと捉え、簡体字および語彙の学習における指導法について考察を行ったが、これを除けば、文法上の語句の誤用や表現の誤用については広く研究されているものの、簡体字書写については文法・表現・発音に並ぶ一つの指導分野として注意を払われていないようである。これは、日本語を母語とする学習者に対する中国語教育において、簡体字表記の正確さがさして重視されていない状況を示しているのではないかと推察される。事実、本論を執筆するにあたり、5年にわたる中国語試験の採点済みの答案をもとにデータ収集を行ったが、明らかに簡体字が誤記されている場合であっても減点しない例が多数あった。無論、採点は採点者の裁量が発揮される状況であるし、このような一部の事象を全体の問題として拡大解釈することはできないが、少なくとも、簡体字の不正確さが必ずしも問題にされない事例の一つとして挙げることができるだろう。また漢字の特性上、筆記された字体に微少な差異が存在したとしても、英語のスペルミスとは異なり、概ね意味を理解することができるため、実際にはネイティブにも通用してしまうという実情もある。

日本語母語者の簡体字誤記の研究については、中国においては王幼敏 1996 および陳紘 2001 が、比較的詳細に日本人学生の誤記を分析している。ともに簡体字誤記のパターンをいくつか分類し、日本人学生の誤記と欧米人学生との誤記の傾向の違いを指摘している。但しこれらの研究においてデータ収集の対象となった学生は、中国留学中かつ中級程度の水準に達した日本人学習者である。中級程度の学習者には、初学者には見られない、音声から該当する漢字を推測した誤記などより複雑な誤記が発生する。さらに一字単位の誤記に限らず、単語単位の誤記も対象とされており、中国語の語彙が比較的多い学習者による、語義の推測から誤記されたものも含まれ、これもやはり初学者には見られないケースといえる。また、中国在住の留学生と日本在住の初学者とでは、簡体字に接する機会が質・量ともに比較にならないのは明らかである。

そこで、本論では日本語母語者の中国語初学者を対象とした学習方法を検討するため、学習開始後1年未満の未習外国語履修者に限定して、比較のため参照可能／不可能の2通りの状況下における誤記のデータを調査した。

2. 調査概要

中国語初学者による「参照不可能な状況（以下調査 A）」ならびに「参照可能な状況（以下調査 B）」の2つの状況における誤記を分類・集計する調査を行った。以下に調査対象とその方法について述べる。

2-1. 調査 A の対象

2012年から2016年にかけての、三重大学共通教育未習外国語（2015年以降は教養教育異文化理解）において実施された中国語統一試験に設けられた、記述式解答を求める作文問題の現存する答案をもとに調査を行った。問題は全ての回で5問ずつ設けられ、簡体字による回答が必須であると試験問題に明示されている。なお、この期間は教科書の内容に変更が無いため、学習する単語は毎年の受講者で共通している。前後期あわせて全14回にわたる答案が現存し、年度・期間によっては現存数が1クラスのみにとどまるなど保存数にばらつきがあったものの、全70種の作文問題に対し、のべ1559名の回答を対象とすることができた。

答案回答者は、原則週2回（但し、履修者の単位取得状況および学部学科が課す必修科目数によって1回の場合もある）の講義を前期・後期各15回受講した、中国語学習1年目の学生ならびに再履修者である。なお、日本語母語者に限定するため、非日本語母語者の答案は除外した。

2-2. 調査 B の対象

調査 A の補足として、教科書・辞書等を参照した場合にも発生する誤記を調査するため、2016年前期（4月～7月）の教養教育異文化理解 I 基礎（中国語）の講義において、作文問題の筆記回答を対象に、写真撮影による記録を行った。作文問題は三重大学中国語教科書の一課ごとに各10～15問ずつ設けられ、学生は受講した内容をもとに、復習問題として実践する。対象としたのは第6課から第8課までの全30問・3クラスの合計90の回答を対象とした。なお、回答者については調査 A と同様である。

2-3. データ集計の対象

以上の対象から全ての誤記を転記して収集し、文字毎に誤記の形状を記録し、同じ形状で誤記された例の数を集計した。さらに、収集した誤記形状の全てをパターン別に分類・集計した。

誤記として集計する文字は、大小を問わず日本漢字との間に差異を持つ簡体字に限定し、差異が全く無いもの（学、中、的、我、三など）は除外した。さらに、「解答者が日本漢字と簡体字との間に差異が存在することを認識した上で、故意に誤記した」と見られるものについても除外することとした。具体的には、以下の条件に合致するものを除外した。

- 簡体字の全体を記憶しておらず、意図的に部分を欠損させた状態で書かれたと見られるもの。（例：画→田 們→イ など）
- 該当する中国語の単語を記憶しておらず、故意に日本語の同義の単語に置き換えて書かれたと見られるもの。（例：邮局→郵便局 词典→辞書 など）
- 白紙回答（記述なし）だったもの。

以上の基準を設定した上で、全ての誤記について簡体字1字毎に抽出し、それぞれの誤記毎に集計した。

3.調査結果および分析

3-1.調査 A

3-1-1.結果

調査 A を行った結果、のべ 1559 名の答案の中から 1800 の誤字を確認した。すなわち、回答者 1 名につき平均 1 字以上の誤字が存在することとなる。全体においては、計 95 種の簡体字について全 335 の誤記の形状（バリエーション）が確認された。

先ず、陳絨 2001 に倣い、誤記のレベルについて部分（偏旁・冠・繞など）および筆画に分類し、以下の 1) ～7) のように分ける。図は各パターン別の誤記例とする。

- 1) 部分の誤認：異なる部分と取り違えて書いた例

<図 1>

正	誤	正	誤
新	𠂔	清	𠂔

- 2) 部分の余剰：余分な部分がある例

<図 2>

正	誤	正	誤
典	𠂔	开	𠂔

- 3) 部分の不足：部分が不足している例

<図 3>

正	誤	正	誤
脑	𠂔	但	𠂔

- 4) 部分の位置の誤認：部分の配置を誤った例

<図 4>

正	誤	正	誤
懂	𠂔	躺	𠂔

5) 筆画の誤認：異なる形の筆画で書いた例

<図 5>

正	誤	正	誤
饭	飯	吃	吃

6) 筆画の余剰：余分な筆画がある例

<図 6>

正	誤	正	誤
个	仝	你	你

7) 筆画の不足：筆画が不足している例

<図 7>

正	誤	正	誤
写	写	没	没

これに加え、筆者独自の分類として 8) ~10) の分類を設定した。

8) 類似の異字：類似した異字と取り違えて書いた例

<図 8>

正	誤	正	誤
车	东	懂	懂

9) 日本漢字の使用：簡体字ではなく日本漢字で書いた例

10) その他：書くべき簡体字の原形をとどめていない例

以上のパターン別に誤記形状を抽出したところ、陳紘および筆者の分類により、集計対象となった解答から全 10 種類のパターンの存在が、全て確認された (表 1)。

<表1>実際に確認された誤記の例（※すべて左が正、右が誤）

1)部分の誤認	买→𦉳	样→祥	躺→𦉳	喝→喝	镜→鏡
2)部分の余剰	买→𦉳	旅→游	间→侖	典→𦉳	开→𦉳
3)部分の不足	但→旦	菜→采	该→亥	游→游	脑→𦉳
4)部分の位置の誤認	躺→𦉳	懂→懂	驶→𦉳	为→为	游→游
5)筆画の誤認	车→𦉳	东→东	贵→𦉳	电→申	书→𦉳
6)筆画の余剰	钱→𦉳	踢→踢	你→你	刚→刚	长→长
7)筆画の不足	你→你	爸→𦉳	为→为	们→𦉳	没→没
8)類似の異字	车→东	喝→喝	今→令	墙→壇	懂→懂
9)日本漢字の使用	旅→旅	着→着	画→画	广→𦉳	海→海
10)その他	邮→𦉳	躺→𦉳	赛→𦉳	懂→𦉳	熬→𦉳

文字によっては使用頻度・出題頻度が大きく異なるため、単純に誤記の総数から誤りやすい文字を抽出することはできないが、誤記パターンの偏りを数値から判断することは可能であろう。そこで全誤記形状のうち5名以上が同一の形状で誤記した55例を頻出誤記形状として集計し、パターン別に集計すると、「9）日本漢字の使用」が最も多く、「1）部分の誤認」「8）類似の異字」の割合も比較的多い結果となった。さらに、出題頻度による偏りを排除するため、誤記対象となった簡体字の総数(a)に対する、頻出誤記形状数(b)の割合を算出したが、やはり日本漢字の使用による誤記の割合が最も高い16%であった（表2）。また、2）～4）で頻出のものはいずれも0となり、誤記形状は部分より小さな、筆画レベルの誤記が多いことが分かった。

<表2>

	誤記形状の総数	誤記された文字の数(a)	頻出誤記形状の数(b)	(a)に対する(b)の割合
1)部分の誤認	134	44	8	4%
2)部分の余剰	7	6	0	0%
3)部分の不足	12	12	0	0%
4)部分位置誤記	5	5	0	0%

5)筆画の誤認	20	11	4	2%
6)筆画の余剰	18	14	3	2%
7)筆画の不足	24	16	1	1%
8)類似の異字	40	28	8	4%
9)日本漢字の使用	48	48	31	16%
10)その他	27	15	0	0%
合計	335	-	55	-

3-1-2.分析

まず、誤記パターンが多いものに注目し分析する。「1) 部分の誤記」「8) 類似の異字」「9) 日本漢字の使用」の3パターンによって誤記例全体の大部分が占められる状況について、具体的にいかなる原因が考えられるか。実際の1)、8)、9)のパターン(表1)を観察し、以下3点が推測された。

①日本漢字と全体／部分が同じであるという誤解

②日本漢字の似た別字／別部分との取り違え

③該当する簡体字が日本漢字と異なることは認識しているが、全体像の記憶が曖昧簡体字であることを認識しつつも正しく記憶できていない、或いは日本漢字と簡体字の差異自体を記憶していないことが誤記の主たる原因であることがわかる。これらは日常的に漢字を使用している日本語母語者にとって、簡体字が「知り得る全ての漢字」ではないからこそ発生する誤記パターンである。すなわち、日本語母語者が簡体字を学ぶ際には、先ず「使い慣れた日本漢字と『異なるものはどれか』を認識」し、次に「その簡体字と日本漢字の『どの部分が異なるのか』を認識」という手順が発生せざるを得ない。学習者がこの手順を注意深く行った上で簡体字を記憶した場合、誤記の確率は低下すると考えられるが、そうでなかった場合に①ならびに②の問題が残り、学習者は日本漢字で或いは日本漢字の部分や筆画を使用して誤記してしまう。

簡体字の偏旁の多くは日本漢字に比べ簡略化されているが、簡略化にあたっての法則性が把握しづらいものであることも誤記の原因となる。調査の過程で、突出して多く誤記される偏は「钅(金偏)」、次に多いものは「饣(食偏)」であることが確認された。これら簡略化された偏は板書・活字を問わず相対的に小さく書かれがちなため、正確な形を学習者が認識しづらく、日本漢字の偏に似た形状に書かれてしまう。

<図9>

正	誤	正	誤
饭	飯	钱	銭

簡体字の場合、金偏と食偏は2画目が水平な横画、或いは水平な横画で始まる形であるが、

日本漢字と同様に2画目を斜めか右払いの形で書いた例が、これらの誤記の中で最も多いパターンであった。同様に、9)に次いで誤記が多い1)のパターンにおいても、簡体字の簡略化された部分を、それに類似した日本漢字の部分と取り違えた②のケースがしばしば見られる。これもやはり、漢字簡略化の法則性の難解さが初学者にとって大きな壁となっていること、そして日本漢字の素養が強く記憶に影響していることの表れであろう。

また、1つの文字に対する誤記形状のバリエーションが有意に多かったものは、「賽（競う）」の24種、「躺（横になる）」の22種、「墻（壁）」の20種であった。この3字に限定して誤記パターン別の多寡を参照すると、8)ならびに10)のパターンに偏った。これらは日本の常用漢字に無く、日本語を母語とする学習者にとって、多くの場合中国語を学ぶ際に初めて目にする漢字であり、言い換えれば「未知の外国語文字」として学習する字である。さらに、いずれも後期（10月以降）の試験範囲であり、作文・例文の中で使用される頻度は比較的低く、表意の面からも部分を推測しづらいため、②ならびに③の状況が発生する。したがって文字の形状・バランスが類似するものを書く、或いは問題文に書かれた日本語から部分を推測するなど、結果的に筆画・部分のレベルより大きく誤った誤記となる。日本語母語者は体系的に漢字を理解しているとはいえ、それはあくまでも日本漢字の体系である。このような未知の漢字の記憶が定着しづらいことの背景には、学習者自身の漢字の知識に対する依存があるのではない。

また、誤記パターンの「2)部分の余剰」・「3)部分の不足」・「4)部分の位置誤認」には、頻出の誤記形状が無かった点も看過してはならない。これこそ、誤記パターン全体に日本語母語者の漢字知識が大きく影響していることの、もう一面の表れであるといえよう。漢字の部分は筆画とは異なり、1字の中に占める割合が大きく、文字全体のバランスを左右するが、偏旁等部分についての基本的な知識が高等学校までの国語教育においてすでに養われているため、漢字に慣れた日本語母語者は、文字の部分構成のバランスから誤りに気づくことが可能であり、学習の過程においても、あまりにかけ離れた字体で記憶することは稀なのである。

以上のように、日本語を母語とする初学者の簡体字誤記の傾向を分析すると、漢字に慣れた学習者が、簡体字を「外国語の文字」としてではなく、日本漢字の延長として理解しがちであることがわかる。無論、日本漢字と簡体字との間に差異が無いものも多数存在しているため、日本漢字の素養が中国語の補助となることは否めない。偏旁等の部分を含め、漢字の構造についてある程度の法則性を把握しており、文字の整合性が失われてしまうことは稀である。しかし、一方ではそれ故に発生する誤記も数多く存在するのである。

3-2.調査B

3-2-1.結果

調査Aにおける誤記は定期試験の解答であるため、学習者が正確な簡体字を参照しない、完全に自身の記憶のみに頼った状況における誤記である。しかし、参照可能な状況下にあっても誤記は発生する。調査Bのケースでは、教科書・辞書等を参照し、転記することが可能であるため、調査Aと比べ誤記の確率は有意に低下したが、完全に無くなることはなかった。

記録の結果、全20の簡体字において、計40種の誤記形状が確認された。サンプル数は調査Aに比べ極めて少ないが、同様のパターン分類を行ったところ9)が最も多く、次いで1)・5)のパターンが多かった(表3)。また、2)～4)および10)の誤記は確認されなかった。さらに1)および5)については、日本漢字との間に微小な差異を有する簡体字に集中する傾向が看取

できた。なお、誤記パターン・誤記形状の種類については、調査 A との差異は確認されなかった。

<表 3>

	誤記形状の 総数	誤記された 文字の数
1)部分の誤認	5	4
2)部分の余剰	0	0
3)部分の不足	0	0
4)部分位置誤記	0	0
5)筆画の誤認	5	4
6)筆画の余剰	2	1
7)筆画の不足	3	3
8)類似の異字	1	1
9)日本漢字の使用	9	9
10)その他	0	0

3-2-2.分析

調査 B においては、3-1-2 で挙げた「③該当する簡体字が日本漢字と異なることは認識しているが、全体像の記憶が曖昧」の原因による誤りは当然発生し得ず、全ての例が「①日本漢字と全体／部分が同じであるという誤解」「②日本漢字に似た別字／別部分との取り違え」から発生する。この調査で誤記対象となった文字の特徴は、以下 a) ～c) の3点である。

a) 日本漢字との差異が極めて微小なもの（例：「非→非」「条→条」 など）

このケースは、一見した際に簡体字と日本語漢字との間に差異が無いかのように見えてしまうため発生する。

b) 日本漢字にはほぼ見られないパターンの部分・筆画があるもの

<図 10>

正	誤	正	誤
车	车	东	东
正	誤	正	誤
发	发	买	买

「车」および「东」の2画目ならびに「发」の1画目は、簡体字にしばしば見られる「撇折（左払い折れ、1画）」であるが、これを「左払い+横画（2画）」に書くケースが明らかに多い。これは日本漢字における「撇折」が「ム」の1画目として書く以外にはほぼ見られないだけでなく、基本的に他の筆画と交差しないために、筆画の部分として馴染みのある「左払い+横画（2画）」であると誤解してしまうために発生する。また「买」は、冠の部分がワ冠に書かれるケースが多い。日本語にはこのようなフ型の冠が無いため、学習者は馴染みのあるワ冠と誤解してしまう。この場合、教科書等を繰り返し参照・転記可能な場合であっても、フォントや活字サイズの都合上、誤解が解消されないまま記憶してしまうのである。

c) 日本語漢字に類似する異字／類似する部分があるもの

<図 11>

正	誤	正	誤
你	你	舒	舒

「你」の旁が「弥」「称」の旁と同じに書かれてしまう誤記形状は、調査 A においても有意に多数だった。この文字は二人称代名詞であり頻出の簡体字であるが、日本語では使用しない文字かつ日本漢字には無い傍の形状であるため、誤記される機会が最も多い。また、「舒」の偏はそのままで日本語に存在しない部分であるが、「舍」の字に似ているため、図 11 のように誤記されがちである。このように b) と同様、誤解が解消されないまま記憶してしまう。

以上から、誤記は単純に記憶の誤りが原因となるだけでなく、簡体字を初見した際の印象によって発生した誤解も原因となることがわかる。この場合、参照可能であるが故に正確さが保証されてしまい、誤った知識のまま繰り返し筆記され、記憶が定着していくのである。これもやはり、漢字表記に慣れた日本語母語者独特の誤記パターンであるといえよう。

4. 指導法

以上の調査と分析から、初学者の誤記は教科書・辞書等を参照可能／不可能いずれの状況下においても、以下の三つのタイプの簡体字において発生しやすいと考えられる。

- 日本語環境において目にする機会が極めて少ない字、日本語には無いもの
- 教科書で使用されることが少ない字、書く機会が少ないもの
- 板書や教科書の活字からは正確な筆画がすぐに分かりづらいもの

誤記のパターンとしては、いずれも日本漢字の素養が記憶に干渉することが確認されたが、学習者の誤解を正せば、誤記の原因の大部分を解消することができるであろう。そのためには、いかなる指導が効果的であるか。

参照可能な状況下で発生する誤記は、学習者各人の習得に対する熱意が関与するものではないため、教員の積極的対処によって改善せねばならない。学習者に誤解を自覚する機会を与えるため、教員による指摘に加え、学習者が自主的に確認するよう誘導することも必要である。まず、教員は誤記の可能性が高い簡体字を把握し、「一見した際の誤解」が形成される前、すなわち可能な限り学習者が初見の段階で（講義中ならば教科書の新出単語として学ぶ時点が望ま

しい) 注意喚起する、或いはプリント学習等でリストアップし、正確な簡体字の部分や筆画を認識する機会を与える、教科書の活字サイズ以上の大きな字を手本として、なるべく書き順も示しつつ正しく書き写させるなど、「簡体字は日本漢字の延長ではなく、一から学ぶ外国語の文字である」という意識が共有できるよう工夫することにより、誤解に気づく機会を増やすことができるであろう。また、学習者が新出の簡体字を最初に筆記するのは通常、教員の板書をノート等へ書き写す際である。場合によっては教員個人の字体の癖が誤記の原因となることもあるが、癖を完全に消すことは難しいため、学習者が認識した字体と正確な字体とを突き合わせて確認する機会を、意識的に与えるよう努める必要もあるだろう。またこのような指摘は、日本漢字と簡体字の間に差異が存在するものに限らず、日本の常用漢字ではない文字、書写の頻度が少ない文字についても同程度行わねばならない。

学習者が自主的に確認するよう誘導するためには、書写した字を自己チェックする状況を作らねばならないが、日本語を母語とする学習者は自身が誤記する可能性を低く見積もる傾向にあるため、自己チェックはほとんど行われぬのが実情である。しかし、実際に効果をあげた例を紹介しておきたい。本稿で使用するデータを収集するため「誤記を発見した場合、逐一それを撮影記録する」と筆者が受講者に宣言した際、そのほかの働きかけが無かったにも関わらず、学習者が自主的に確認するようになったのである。この現象から学習者の意識変化を推測すると、作文問題の答えを黒板に筆記するよう教員から指示された際、或いは提出物に筆記する際など、自身の字が教員に「強く注目される」と自意識に刺激を受けただけでなく、誤記を撮影記録されている他者の様子を見ることによって「簡体字とは、転記であってもしばしば誤記してしまうものである」と実感したのだと考えられる。したがって教科書等で簡体字を参照する際通常より注意深く字体を観察し、すでに記憶したものについても再度確認するよう変化した。これと同一の方法を全ての教員が実行することは難しいが、日本漢字と簡体字には予想以上の差異が存在すると認識させ、自身の誤記に対する関心を促すアプローチによって、正確な簡体字の知識を身につけさせる指導が可能であることを示しているといえよう。

5. 結び

コミュニケーション手段としての作文がほぼデジタル化し、筆記から「入力」へと転じた今日、中国語教育の現場において、簡体字の筆記に比べ文法が一層重視される傾向となるのは自然な流れであろう。しかし、それ以外の様々な要因が存在するとしても、「簡体字」の存在を教え、かつ筆記による試験を課する初級中国語の教育にあつて、簡体字の習得を学習者の自主学習に任せたままでは、外国語教育として片手落ちであると言わざるを得ない。日本語母語者の漢字慣れに教員が甘え、外国語としての正確な文字を学ぶ機会を、学習者から奪うことがあつてはならないだろう。但し、日本漢字の素養それ自体は、中国語の習得において全て不利に働くものではない。特に、高等学校の国語教育における漢文の知識を含め、漢字の表意の理解が可能である点で、日本語母語者は中国語学習者として有利である。指導にあたっては、これらの日本語母語者特有の問題点に注意するだけでなく、優位点を利用することにより、学習者の興味とモチベーションを支えていかねばならないと筆者は考える。

本論は簡体字の誤記についてのみ検討したが、日本語を母語とする中国語学習者特有の学習過程における障碍はこれに限らず、単語・表現の誤用、文法の誤りにも独自の傾向があり、す

でに先行研究も多い。今後はそれら日本語母語者特有の誤用についてさらに調査を進め、中国語学習ストラテジーの研究を課題とし、より効率的な学習法・指導法を検討していきたい。

【参考文献】

陳絨「日本学生書写漢語漢字的訛誤及其生産原因」、『世界漢語教学』、2001 年第 4 期（総第 58 期）

王幼敏「対日本人書写中文漢字差錯規律的分析及思考」、『華東師範大学学报（哲学社会科学版）』、1996 年第 4 期

向野崇倫・向野康江「簡体字の特徴に着目した中国語学習の要点」、『茨城大学教育実践研究』Vol.27、2008 年